

檜隈寺周辺の調査

—第180次

1 調査地の概要

檜隈寺は、渡来系氏族東漢氏の氏寺とされる7世紀創建の古代寺院である。1979年から1986年にかけて奈良文化財研究所が実施した塔・金堂・講堂・中門・回廊の調査により、その伽藍配置は寺が立地する丘陵の方位に応じて北で23~24°西に振れ、講堂と金堂を結ぶ回廊の西面に中門を開くなど、他に例のない特徴をもつことが判明した。

2008年度からは、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業にともない、奈良文化財研究所・明日香村教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所が分担し、檜隈寺周辺の事前発掘調査をおこなってきた。檜隈寺の南側や西側では、塔の南方およそ100mの位置において検出した平安時代後期の2基の大型柱穴SX950（『紀要 2012』）は知られるものの、古代の遺構はほとんど確認されていない。

本調査はこの檜隈寺南面における未調査地の遺構確認を目的とするもので、丘陵斜面部（A区）と丘陵上の金堂南東（B区）の二カ所に調査区を設定した（図172）。

A区は檜隈寺の回廊東南隅推定地にあたり、檜隈寺の伽藍周辺遺構の確認を目的として設けた。B区は金堂南東の未調査区で、塔の東西中軸を通る南北線の延長上に位置に設けた。檜隈寺では、平安時代後期に木塔跡に十三重石塔が建立され、講堂基壇の改修がおこなわれていることから、建立当初だけではなく、古代末から中世までにおける檜隈寺の実態とその変遷過程を知るてがかりを得ることも目指した。

調査期間は2014年1月9日から3月17日までである。調査面積はA区195㎡、B区100㎡、合計295㎡である。A区は当初180㎡であったが、遺構の広がりを確認する必要が生じたため、東西に計15㎡拡張し、195㎡とした。

2 検出遺構

基本層序 調査区の基本層序はA区とB区でやや異なるが、上から造成土、床土、中世の遺物包含層、地山（基盤層）という順で大きくは共通する。調査区付近の基盤

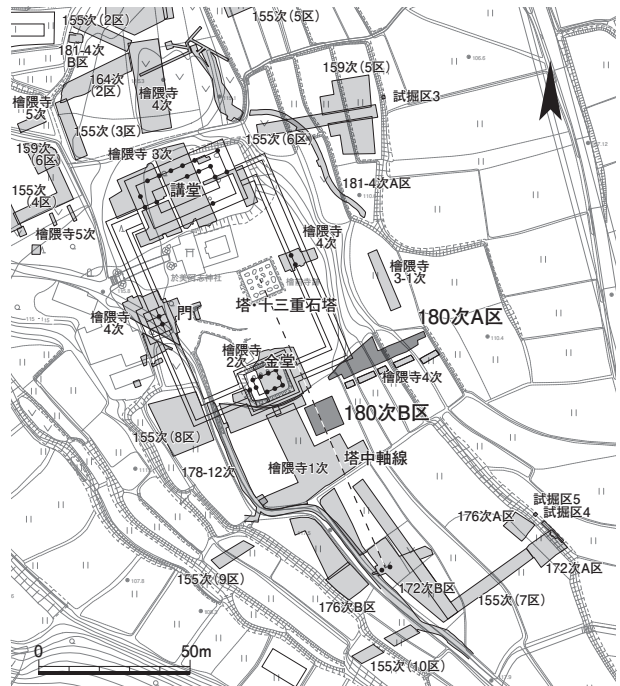


図172 調査区位置図 1:2500

層は花崗岩類とその風化土・崩積土のほか、風成シルト、またはそれらが混合した堆積物からなる。A区では斜面下部ほど厚く中世の遺物包含層が堆積する（図173）。B区では平坦な地山面の上にほぼ水平に中世の遺物包含層が堆積している。遺構は、中世の遺物包含層を除去した地山面で検出した。B区の遺構検出面の標高は約116.60mである。

主な遺構 主な遺構は、A区が掘立柱建物4棟、掘立柱南北塀1条、東西溝1条、南北溝1条、大土坑1基、B区が掘立柱建物3棟、大土坑4基、L字大溝1条、L字溝1条で、ほかに土坑・小穴・小溝がある。

A 区（図173）

総柱建物SB960 A区西寄りにおいて柱穴8基を検出した。柱穴1基が大土坑SK968に壊され失われており、また調査区外北側に延びる可能性があるが、南北2間以上、東西2間に復元できる（図173）。柱間は南北方向が6尺（約1.8m）等間、東西方向が5尺（約1.5m）等間、柱掘方は一辺0.8m前後の隅丸方形で、柱穴の深さは最大でおよそ0.7mであった。建物方位は北で約29°西に振れる。検出した地山面は傾斜しているが、柱穴底面の標高は±10cmの範囲で揃っており（図175）、建物が建てられた時点では地盤はある程度平坦であったとみられる。柱穴出土遺物が少ないため厳密な時期は不明であるが、中

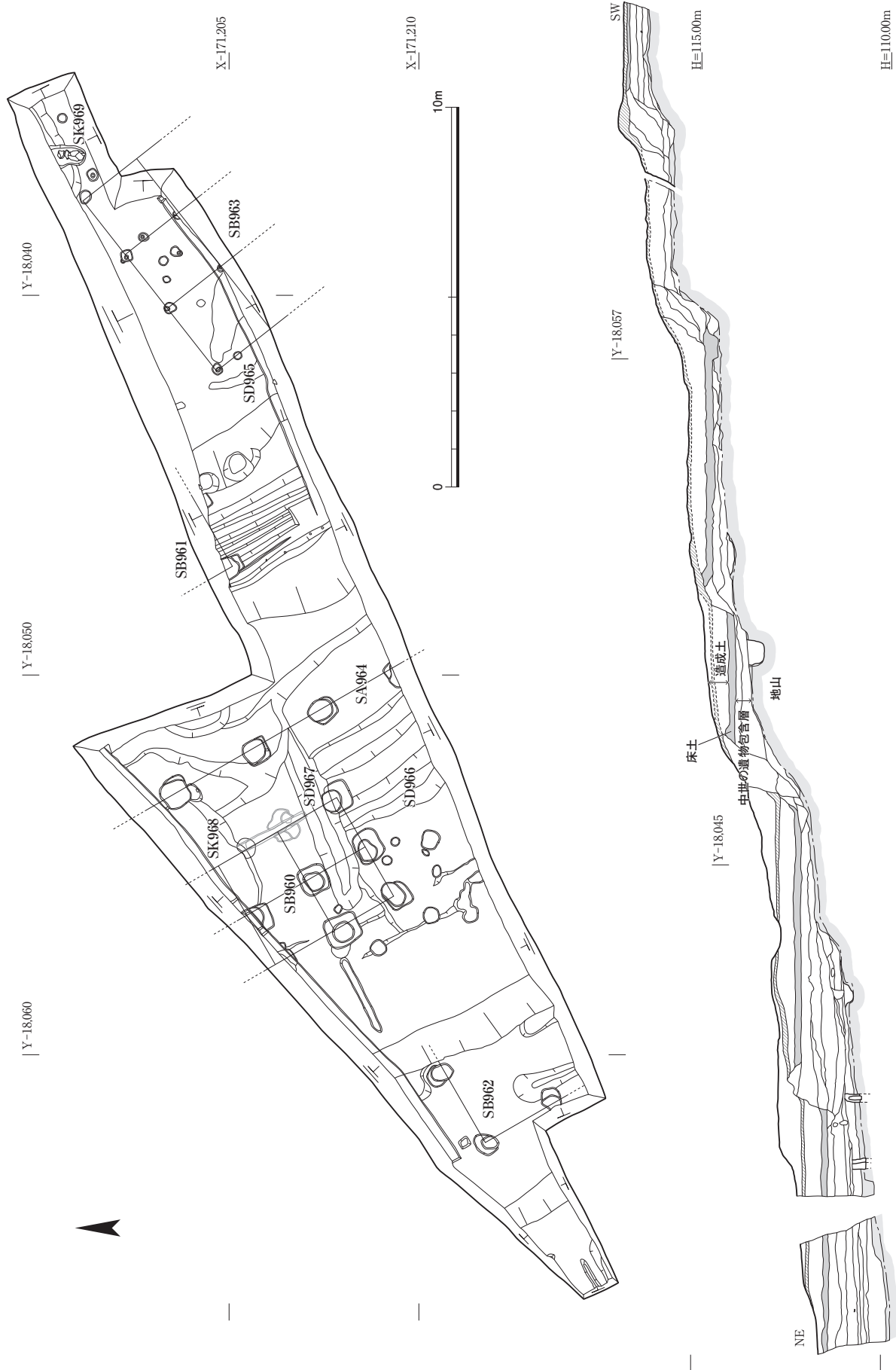


図173 第180次調査A区遺構図・南壁土層図 1 : 150



図174 SB960・SA964 (南東から)

世に降る遺物を含まないことと柱穴の規模および形状から古代の建物と推定しておく。

掘立柱建物SB961 A区東寄りの斜面中腹下部において柱穴2基のみ検出した。規模は不明である。柱掘方は一辺0.5m前後の隅丸方形で、柱穴の深さはおよそ0.5mであった。SB960と同様柱穴の規模と形状から古代の建物と判断した。

掘立柱建物SB962 A区西端の丘陵頂部付近で柱穴3基を検出した。後世の削平のため規模は不明であるが、東西2間以上、南北2間以上ある。柱掘方は径0.5~0.6mの隅丸方形ないし不整形で、柱間は7尺(約2.1m)等間であった。建物方位は北で約29°西に振れる。上述の建物SB960・961と比べて柱穴の形状がやや不整形であるが、その規模と、中世に降る遺物を含まないことから古代の建物と判断した。

掘立柱建物SB963 A区東端の丘陵下部で柱穴6基を検出した。調査区外に延びるため規模は不明だが、東西3間以上、南北2間以上と推定される。柱掘方は非常に

小さく0.2~0.3mの円形ないし隅丸方形で、柱間は西の隅柱との間が7尺(約2.1m)となる以外は、6尺(約1.8m)である。建物方位は上述してきた建物よりも大きく西に振れる。掘り込み面からみて中世以降に降る。

掘立柱南北塀SA964 SB960の2.3m東で柱穴4基を検出した。柱間は7尺(約2.1m)等間、柱掘方は一辺0.6~0.7mの隅丸方形で、柱穴の深さは最大でおよそ0.5mであった。SB960より抜取穴が大きい特徴がある。方位は北で約29°西に振れる。柱穴の規模と形状から古代の塀と判断した。

南北溝SD966 SB960の南側で検出した素掘溝。幅0.7~1.0m、深さ0.2mで、北側で削平のためとぎれるが、長さ2.5m分を検出した。重複関係からSB960より古い。

東西溝SD967 南北溝SD966の北側で検出した素掘溝。幅0.9m、深さ0.2mで、東側で削平のためとぎれるが、長さ6m分を検出した。SD966にT字状に交差するが、重複関係からSB960・SD966より新しい。

大土坑SK968 SB960の北東に重複する位置で検出した。長さ3.8m、幅1.2m以上、深さ0.3mである。SB960・SA964の柱穴を壊している。

B 区 (図176)

掘立柱建物SB970 B区東半において柱穴9基を検出した。調査区外南側に延びるため、桁行4間以上、梁行2間の南北棟に復元できる。柱間は7尺(約2.1m)等間であるが、北妻柱がやや西によっている。柱掘方は径30~50cmの不整形で、柱穴の深さは最大でおよそ50cmであった。建物方位は北で約22°西と、檜隈寺伽藍の振れに概ね一致する。柱穴出土遺物に瓦器を含んでおり、建物の時期は中世初頭の12世紀後半から13世紀前半までに降る。

掘立柱建物SB971 SB970と重複する位置において柱穴13基を検出した。桁行4間、梁行は北妻が2間、南妻

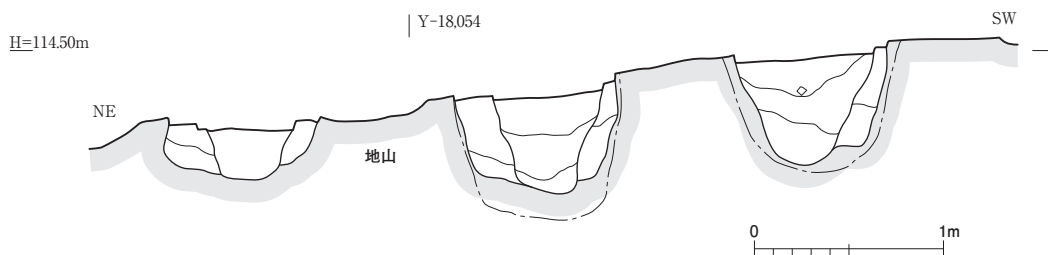


図175 SB960南側柱列断面図



図176 第180次調査B区遺構図 1 : 150

が3間となる南北棟で、柱間は桁行方向が7尺（約2.1m）等間である。柱掘方は径0.2~0.3mと非常に小さく、不整形のものに加えて一部は平面形が菱形を呈する特殊な柱穴がある。柱穴の深さは最大でおよそ0.5mであった。建物方位は北で約19°西に振れる。柱穴埋土に瓦器を含み、時期はSB970と同じく中世初頭に降るが、柱穴の重複関係からSB970より新しい。

掘立柱建物SB972 SB970・971の東側で柱穴4基を検出した。東半が調査区外にあるため詳細は不明だが、桁行3間以上、梁行1間以上の南北棟と推定され、柱間は7尺（約2.1m）等間である。柱掘方は径0.4m前後の不整形円で、柱穴の深さは最大でおよそ0.4mであった。方位は北で約19°西に振れる。柱穴の埋土に瓦器を含み、建物の時期は中世初頭に降る。

L字大溝SD974 調査区西・南に沿って延びる素掘溝。幅1.4m、深さ最大0.2mで、長さ12m分を検出した。

L字溝SD975 SK976に接続し、その北側と東側に延びる素掘溝。幅0.3m、深さ最大0.3mで、長さ12m分を検出した。

大土坑SK976 B区中央南東寄りで検出した。径約3.0mの不整形円ないし隅丸方形で、深さ0.4mである。周

囲に最大で径0.3mほどの石が10個残っており、石で護岸していた可能性がある。埋土に同様の石と瓦を多く含んでいた。次に述べるSK977・978より古いが、SB970・971との関係は不明である。

大土坑SK977 SK976を壊してほぼ同じ位置に掘られている。径約2.2mの不整形円で、深さ0.4mである。SB970・971の柱穴を壊して掘削している。

大土坑SK978 SK977の東側に接して検出した。径約2.2mの不整形円で、深さ0.2mである。SB970・971の柱穴を壊して掘削している。

大土坑SK979 調査区北端西寄りで検出した。径約2.6mの不整形円とみられ、深さ0.3mである。

（森先一貴／文化庁）

3 出土遺物

土器 整理用木箱6箱（A区2箱・B区4箱）の土器が出土した。古墳時代から中世までの土師器、須恵器、瓦器があり、中世の瓦器類が主体を占める。古代に属するものは主に包含層から出土したが、少量かつ細片で図示できるものはない。ここではまとまった資料を出土したB区の出土土器について述べる（図177）。1は大土坑SK977出土の土師器皿。口径9.6cm、器高1.5cm。底部外面がややくぼむ。2、3は土坑SK982出土。2は土師器皿。口径9.6cm、器高1.5cm。底部外面がくぼむ。3は瓦器碗。口縁部外面上半には粗い横方向のミガキを施す。口縁部内面は密な横方向のミガキ、見込み部分には螺旋状のミガキを施す。高台は断面三角形。4は小穴SP985出土の瓦器皿。底部内面にジグザグ状にミガキを施す。

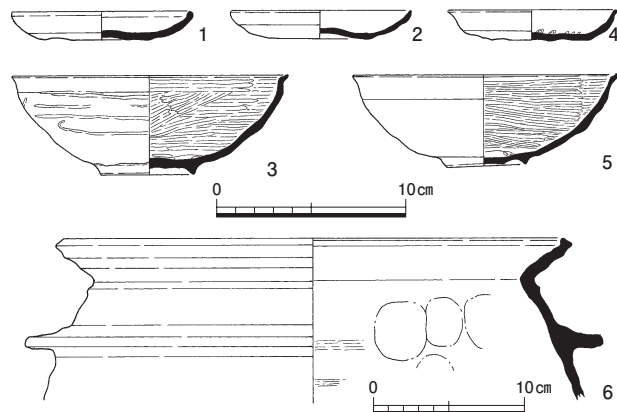


図177 第180次調査B区出土土器 1 : 4 (6のみ 1 : 5)
(1 : SK977, 2・3 : SK982, 4 : SP985, 5 : SD975, 6 : SK976)

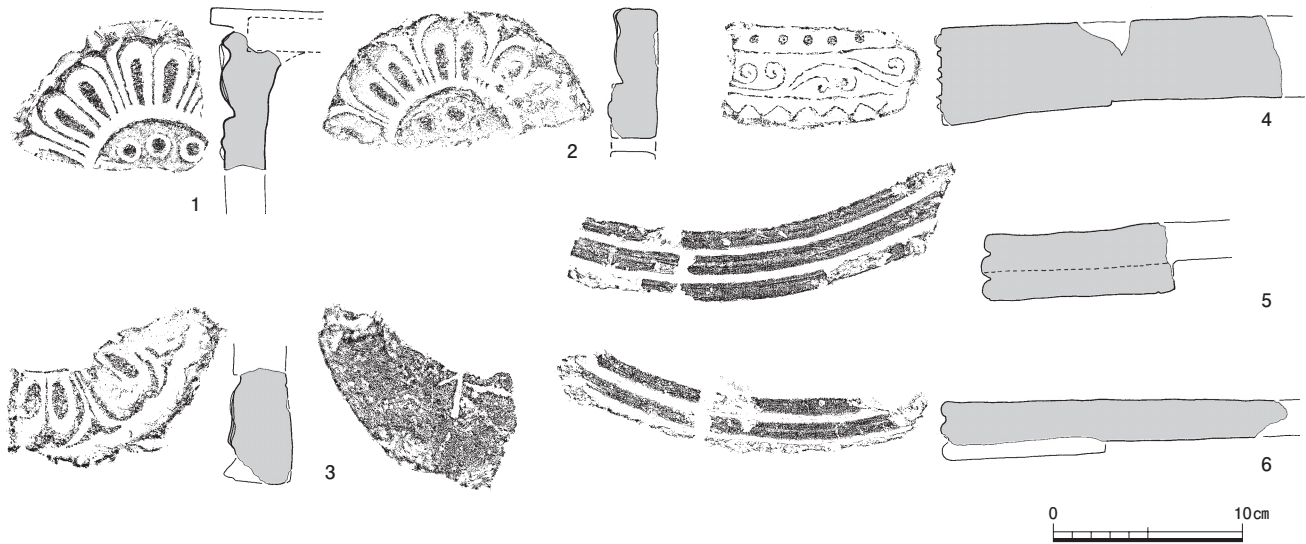


図178 第180次調査出土軒瓦 1:4

表23 第180次調査出土瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
I	B	1	II	A	12	垂木先A	5
I	F	1	II	B	1	垂木先B	3
II	A	4	II	C	1	へら描平瓦	2
II	C	1	II	D	2	へら描丸瓦	1
II	-	4	II	E	2	面戸	2
III	A	1	II	新	2	隅切平瓦	3
III	-	2	II	-	5		
不明		2	III	A	2		
			不明		1		
計		16	計		28	計	16

5はL字溝SD975出土の瓦器椀。外面のミガキの有無は磨滅により確認できない。内面は密な横方向のミガキ、見込み部分には螺旋状のミガキを施す。高台は断面三角形で、3に比べるとやや細身である。6は大土坑SK976から出土した土師器土釜。胴部から口縁部へと「く」の字状に立ち上がり、鏝部はやや幅を有する。内外面ともにナデにより調整するが、胴部内面には無文のタタキ当具痕や木目状の条線が部分的にみられる。これらの土器のうち瓦器椀は、見込み部分に螺旋状のミガキを施し、内面の密なミガキに比べて外面のミガキが粗く、高台が断面三角形で退化傾向にあるという特徴から、12世紀後半から13世紀前半までのものとみられる。(大澤正吾)

瓦類 出土瓦の点数は、軒丸瓦16点、軒平瓦28点、道具瓦16点、丸瓦1113点(101.17kg)、平瓦8302点(408.85kg)と多い。大半が金堂南面のB区から出土した。軒瓦は檜隈寺I～III型式¹⁾からなる(表23、図178)。

軒丸瓦では、単弁八弁で火炎文をもつI型式Bの小

片、素弁のI型式F、轆線文縁複弁八弁のII型式A(図178-1)、II型式Bと思われるもの、線鋸歯文縁複弁八弁のII型式C、II型式種別不明が出土した。II型式Cには瓦当裏面に「吳」の字をへら描きしたものを1点確認している(3)。藤原宮式のIII型式では軒丸瓦6275G同範のIII型式Aの破片のほか種別不明のものが出土した。

軒平瓦は三重弧文のII A型式を中心に(5)、II型式B・C(6)が認められ、四重弧文のII型式Eと笠型施文の四重弧文II型式Dも出土しているほか、新形式とみられる重弧文の小片を確認した。藤原宮式軒平瓦6641Lと同範のIII型式Aも出土した(4)。

道具瓦では、垂木先瓦A(2)・Bがあわせて8点も出土している点が注目される。

さて、軒丸瓦I型式は7世紀前半、軒丸瓦II型式A・B・D-軒平瓦II型式A～Cは7世紀後半で金堂所用、軒丸瓦III型式A-軒平瓦III型式Aは7世紀末から8世紀初頭までで講堂・塔所用である。A区では古代の遺構を検出したが、瓦の出土は少ないため、この場所に瓦葺の建物は存在しなかったと考えられる。一方、B区では古代の遺構を検出していないが、中世の遺構や包含層から多数の瓦が出土した。もっとも出土点数が多いのは金堂所用瓦であることから、これらの瓦は調査区に近接する金堂に葺かれていたものに由来すると考えられる。

(森先)

金属製品 鉄製品が8点、鉛製品が1点出土しているが、遺構にともなうものはほとんどない(図179)。鉄

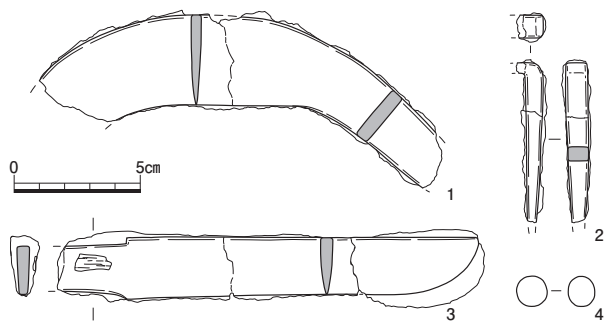


図179 第180次調査出土金属製品 1:3

釘(2)は断面長方形の角釘で、頭部を折り曲げている。先端が欠けており、残存長6.3cmを測る。鉄鎌(1)は有茎の曲刃鎌で、残存長16.2cm、刃部最大幅3.5cm、基部最大幅2.6cmを測る。刃部は断面V字形を呈し、両刃とみられる。鉄小刀(3)は両関の直刀である。刃側はナデ関、棟側は直関につくる。刃部は完存するものの柄側が欠損しており残存長16.7cm、刃部最大幅2.4cm、茎部最大幅2.2cmを測る。刃部は断面V字形を呈し、両刃とみられる。茎部には柄材に由来するとみられる木質が付着している。いずれもB区からの出土で、鉄釘はSD974(平安時代末から中世までのL字大溝)から、鉄鎌と鉄小刀は平安時代末から中世までの小土坑からそれぞれ出土した。なお遺構にともなうものではないが、このほかにA区から鉛玉(4)が1点出土している。蛍光X線分析によって、純鉛製であることが確かめられた(材質分析は降幡順子による)。直径1.0~1.2cm、重さ8.3gを測り、火縄銃に用いたのであれば三匁玉にあたる。

石製品・冶金関連製品ほか A区から砥石1点、鉄滓1点、木炭1点が、B区から羽口1点がそれぞれ出土している。(諫早直人)

4 まとめ

本調査の結果、檜隈寺伽藍南側では主に古代と中世初頭の二時期に建物等が建立されたことが判明した。檜隈寺中心伽藍の創建と、古代末から中世におけるその改修というこれまでの檜隈寺造営史を追認するとともに、新しい知見を追加した。

A区(丘陵斜面部)では、厚く堆積する中世包含層を除去した地山面で古代と推定される掘立柱建物(SB960~962)・掘立柱塀(SA964)を検出した。檜隈寺回廊東南隅の外側に位置し、丘陵頂部より一段低い斜面中腹を削

り出して平坦面を造成し、建物や塀を建てていることがわかった。建物方位は檜隈寺伽藍よりわずかに振れが大きいが、いずれも北で約29°西となりよく一致している。瓦の出土量は極めて少ないことから、これらの建物は瓦葺きとは考えにくい。古代の檜隈寺にともなう何らかの施設である可能性が高い。なお、A区でも丘陵斜面下部では小型で不整形の柱穴からなる中世以降の掘立柱建物(SB963)が建っており、時期によって丘陵上の利用位置が異なっている。

B区(丘陵頂部)では、小型の柱穴からなる掘立柱建物(SB970~972)と、石で護岸していたとみられる大土坑(SK976)およびそれに取りつくL字溝(SD975)などを検出した。いずれも埋土に瓦器を含むことから、時期は中世初頭に降る。中世初頭の建物は、方位が檜隈寺伽藍の振れに概ね一致するものとそうでないものがあり、遺構間のばらつきが大きい。なお、B区では7世紀の金堂所用瓦が多く出土しているが、これはB区内で検出した遺構にともなうものではなく、中世まで繰り返された建物改修の一環としておこなわれた屋根の補修により廃棄されたものと考えられる。平安時代に補修瓦を寺の周囲で製作していたことは、同年におこなった第181-4次調査(本書135頁)でもあきらかとなっている。

以上の遺構の展開状況から、次の点を指摘しておきたい。丘陵頂部は古代の遺構が認められず、本調査区B区のように中世の遺構が主体となる。もともとこの場所に古代の建物が存在しなかった可能性もあるが、地山が平坦にならされている場合が多いことから、中世以降の水田化をともなう開発によって、伽藍中枢部以外では古代の遺構が削平された可能性が考えられる。なお、全体的に古代の遺物が少ない中、金堂所用瓦が多く出土したのは、中世までの寺院改修にともなう屋根の補修によって、古代の瓦が周辺に多く廃棄されたためであろう。一方、A区の斜面中腹では、水田化に際して階段状の造成をおこなう過程で削平がおよばなかった部分において中世の遺物包含層が厚く堆積しており、下層にある古代の遺構が一定程度保存されたと考えられる。(森先)

註

- 1) 花谷 浩「京内廿四寺について」『研究論集 XI』奈文研、2000。